

Title	若槻哲雄氏の五十年
Author(s)	
Citation	大阪大学史紀要. 1987, 4, p. 123-136
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/6886">https://hdl.handle.net/11094/6886</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 若槻哲雄氏の五十年

出席者 若槻 哲雄(元 総 長)

芝 哲 夫(理学部教授 五十年史編集  
実行委員会委員)

熊谷 信 昭(工学部 教授)

山田 朝 治(工学部 部長)

(司会) 梅 溪 昇(文学部教授 五十年史編集  
実行委員会副委員長)(昭和五十九年二月二十日 大  
阪大学事務局名誉教授室にて)

## 一 第二次大戦前後の原子核研究のこと

梅溪 本日若槻先生にわざわざお出ましましたのは、大阪大学の古い経緯についてお話をしていたり、また、先生の総長時代のご経験、つまり一貫教育と教養部改革、その他寮問題についても伺いしようと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

はじめに、先生ご退官のときに「阪大とともに歩んだ四十六年」という研究のお仕事の詳しいご報告をされていますね。その中に、終戦直後にアメリカ軍が来まして、実験装置が破壊されましたことについてかかれておられますが、そのころのことからお話いただけますか。

若槻 阪大のサイクロトロンは昭和十一年からつくり始めて、二年ぐらいでもう働いていたんですよ。それからコッククロフトワルトンは、

わりに小さな装置ですけれど、最高電圧が六十万ボルトという、それでも建物の二階までぶっ通しの大きな部屋をつくって、中性子の研究は、それを使ってやってきました。それから昭和十五年からバンデグラフという加速器をつくり始めましてね、それは私がつくったんですよ。それと、サイクロトロンがあったわけです。戦後そこへアメリカ軍が来て、原子核の研究をやっているところには番兵がずうっと剣付鉄砲でついて、入れなくなっちゃったんですよ。そしてサイクロトロンは破壊されました。サイクロトロンだけなんですよ、破壊されたのは高電圧装置は大したものじゃないと思って、向うはなんにもしなかったんです。それから理化学研究所(理研)に阪大のよりちょっと小さいのと、大きいのと二つのサイクロトロンがあり、二つとも阪大のと同じようにつぶして捨てられたんです。理研は、戦後そのままもう何もなくなっちゃったわけですね。それから京大はサイクロトロンはまだつくりかけで銅線か何かだけあったそうです。そして、コッククロフトワルトンがやっぱりありまして、それを使って戦後何か始めました。それから東大も二〇〇万ボルトぐらい出すバンデグラフ加速器を持ってまして、それも壊されなくて済んだわけです。

梅溪 戦後の阪大以外の全国的な状況はどうなんですか。

若槻 何しろバンデグラフ加速器というのは、みんなまだ未完成だったわけですよ。それでも初めは原子核に関する研究は全部禁止になったわけです。そのうちにちょっと緩くなりましたが、しかし、しよっちゅう状況を報告しろというんです。どういう研究をやったって、どういう状態かということもGHQに報告せえと。そのために委員会

をつくりまして、各大学から委員ができて仁科芳雄さんが委員長になりました。何しろどこもみんな、研究費も物資も欠乏しているの、ろくろく成果もでないわけですよ。それでお互いに話し合う機会をもつ、そんな組織ができました。そのときローレンスが来るというので、みんな東京に集まりました。菊池正士先生は、日本においたら何もできないからといって、アメリカへ行ってしまって、私が留守を守ってたわけですが、それで行きまして、そこでローレンスを囲んで話をしました。仁科先生が亡くなったあと、朝永振一郎さんがその委員会の委員長になってました。朝永さんが口火を切って、「日本でも小さいサイクロトロンぐらいほしい」と言いましたら、ローレンスが同情して、「そのぐらいのもんいいじゃないか」と言ってくれたんですよ。それまではGHQの係官が来てまして、日本にはぜいたくだとか、食糧の研究でもやれとか言っていたんです。

**梅溪** GHQには科学局とかいうのがありましたが、ローレンスはその責任者として来てたんですか。

**若槻** そうではなくて、ローレンスは昭和二十六年にちょっとだけ来たんです。そして、亀山直人さんが学術会議の会長でした。それでローレンスが帰ってから、それじゃ何とかしようということになったんです。それからいろいろ議論をして、これが結局、のちに「原子核特別委員会」という名前の委員会になりましたが、原子核や原子力のこととは当分そこで議論をしました。そこで、サイクロトロン再建について検討しましたが、結局、阪大が実績があるし、経験のある人もおるからというので、文部省の予算が阪大につきましました。理研は文部

省管轄でないものですから、通産省の前の段階で何かやつぱり役所がありました、そっちの方から金が出まして、サイクロトロンをつくったんですよ。それが日本の原子核が復興する一番初めの話なんです。

**熊谷** 若槻先生、話は全く飛ぶんですけどね、先生は本学の理学部の第一回の卒業生でいらっしゃいますね。理学部に本部がございましたでしょう。あれは理学部のどの辺にあつたんですか。

**若槻** 理学部の支関が上がって、そのすぐ上の階の真ん中のところ、支関の真上のところですね。後に理学部長室になったところが総長室でね。それから一階の、後で理学部の事務室になった辺に、本部の事務がいました。そのあと本部はだんだん大きくなってきたもんだから、狭くなりました。理学部の蓄電池室の屋根の上に木を組んで小屋みたいなをつくって、そこにも本部が入ってましたよ。

**山田** 総長室が理学部から替わったのは今村荒男総長の時代でしたかね。

**若槻** そうでしょうね。正田建次郎総長のときには、すでに理学部ではなかったですね。

**芝** ところがね、楠本長三郎総長の時代に一時総長室がいまの、いわゆる新館という、病院へ移っている時期があるんです。

**若槻** ああ、そうですね。

**芝** だからどの程度本当に毎日総長が、理学部の総長室を使っておられたか。今村総長の時代も、先生どうですかね。

**若槻** 大体、総長なんてあんまり仕事なかったみたいですね、昔は（笑）。

熊谷 私も聞きましたよ。昔の東大総長の話ですが、卒業式の告辞と入学式の祝辞を一年間かけて考えることが、東大総長の主要な仕事だったと言ってます。(笑)。

芝 先生、湯川秀樹先生が中間子理論を考えたのは、あれはやっぱ阪大へ来てからそういう発想をされたのですか。

若槻 阪大です。

芝 それは間違いないですね。阪大で部屋はどこだったんでしょう。

若槻 部屋はね、私よく知ってるんですよ。私の部屋の真向かいだったからね。物理の棟の真ん中に廊下があって両側に部屋があるんですがね、左側が居室で、右側が実験室でした。

芝 左側というのは、南側ですね。

若槻 ええ、南側。で、一番奥に部屋がありましたね、小さい部屋が。そこには山口太三郎という先生がおられて、その手前ところが湯川さんの部屋です。坂田昌一さんが助手で、湯川さんが講師だったのかな。

芝 それは、二階ですか。

若槻 地階の上だから、一階ですよ。その向かいの部屋が実験室ですね、そこを机で半分に仕切りまして手前の方が食堂兼会議室になってました。それでその奥のところで私が実験しておった。

芝 塩見研究所は全然湯川さんは使っておられなかったですか。

若槻 それはね、理学部の建物ができる前には、行かれたことはあるのかもしれないけれどもね。塩見は狭いですからね。それに八木秀次先生や浅田常三郎先生やらが使っておられたから、そんなにいろん

な人が部屋をもらうだけの余地がもうなかったと思いますよ。だから、時折塩見に行ったというだけじゃないですか。

芝 その程度ですか。

若槻 はい。

芝 それじゃやっぱあの発想が浮かべたのは、あの理学部の部屋であると思っただけですか。

若槻 理学部の部屋だと思えますよ。昭和十年でしたね、私らが三年になったときに、もう物理学会へ入れと先生に言われて入会しました。そのころは物理学会の会誌に寄稿するには、必ず発表しなきゃいかんというんです。ところが、年会なんかじゃとても間に合わないでしょう。で、毎月か、一カ月置きか忘れましたけどね、物理学会大阪支部というのをつくって、講演をやっていました。そこで、湯川さんがしょっちゅう何か発表してましたよ。何か黒板の方を向いて小さな声でポソポソ言うてるんですよ。それがいまの話のはじめなんです。菊池先生なんかはもうコッククロフトが働きただてからすぐ実験などをしてられたからね。ぼくら学生であんまりよくわからんけれども、何しろ毎回行っては聞いたとったのですよ。それから学生三人で相談してね、湯川先生何かポソポソ言うてるけど、あれ一体何言ってるのか、いっぺん聞かしてもらおうじゃないかといって、湯川さんを引っ張ってきてね、お話を聞いたことがある。そしたら、そのころは実験的にも認められていないし、はなはだ自信がないような調子でね、何かちょっとだけ話してくれました。

芝 いや、私の先生の小竹無二雄先生がね、湯川先生がノーベル賞

をもらわれた後で言われたことなんですよけれども、湯川先生が阪大の理学部に博士論文を出されましたね。小竹先生は、化学の方ですから、物理のことはわからんけれども、いかにも心配でね、横に菊池先生が座っておられたので、「菊池君、あれほんとに大丈夫かね」と言ったんだっておっしゃっていました（笑）。

若槻 いろんな話ありますよ。そのころはね、伏見康治さんはもう才気煥発で、いまでもそうだけども、やっぱり何か発表したり、それからこれというのがあると、すぐ何でもかんでも手を挙げちゃ、何か質問していた。しかし、湯川先生は黙っているわけですよ。おとなしい先生でね。それで、八木先生が誰かがね、「君、もうちょっと勉強して伏見さんのようになりたまえ」と言うたことがあるという話なんですよ（笑）。それはね、八木先生ならそういうこと言いますわ。何でも言うんです。浅田先生がスペクトルメーターか何か、もう少し上等なやつを買ってもらおうと思って、八木先生に頼みに行ったらね。

「君が——何とかいうよその大学の有名な分光学の先生ですよ——何とか君ぐらい偉かったら買ってやるけれども、君じゃだめだ」と、言われたというてね、浅田先生はそれを、「おれはこんなことを言われたよ」と、学生の前でまたそれを得々と言うんだよ（笑）。「ひどいな」なんて言ってね（笑）。八木先生という先生は、本当に思ったことを言わずに何でも言う先生でね。私も言われたことがあるんですよ。卒業が間近になったときに、八木先生が来いと言われたから、教室にいきましたら、「飛行機会社で物理の卒業生がほしいという話がある。君、行かんか」と、まあ、そこへ行ってたら兵隊いかなです

んだかもわからんだけでもね（笑）。私は、「いや、私はもうちょっと大学へ残って勉強したい」と、言うたんですよ。そしたら「残って言ったって、生活のことだあってあるだろう」と、言われたから、「どうもまだもうちょっと勉強したいから勉強して、それから高等学校か、高等工業か何かの先生の口でもあったら行きたい」と、こう言うたんですよ。そしたらね、「君、そんなこと言ったって、どこだつてみんなポストはふさがつとるんだから、だれか死ぬのを待つのかね」って、こう言われるんですよ（笑）。早々にして逃げて帰りました（笑）。

熊谷 八木先生にひどいことというか、厳しいことを言われてきたえたとする人、たくさんいますね。

若槻 そうでしょう。偉い先生だけどもね。

## 二 大学紛争と寮問題

梅溪 若槻先生のご経歴を拝見いたしますと、ちょうど大学紛争の頃から評議員、理学部長、それから総長になられたわけですが、先生がいろいろご苦労されたことは、私たちの記憶が新たなんですけれども、少し紛争について先生のお感じになられたことなど、お話しして頂きたいのですが。

若槻 私はね、本当は申しわけないんですけども、戦後は実験室にこもりつきりでしたらね、大学の行政的なことはほとんどやらなかったんですよ。だから、紛争の少し前ぐらい、昭和四十一年頃からですね、岡田實先生が総長の頃に評議員になりましたけれど、はじめは紛争の

ことはよくわからなかった。しかし、だんだん大学の様子がおかしくなってきた、理学部の中でもいろんな学生が騒いだりするもんですから。五人委員会というのを昭和四十四年頃つくりましてね。

梅溪 理学部の中ですか。

若槻 理学部の中で、それは二階の塩見研究室にいつでも交代で詰めておって、何かあったらすぐ対処するような体制をつくった。そのころからですね、私が何か少し関係してくるようになったのは。その前には中川正澄さんなんかが評議員で、随分いろいろあっちこっち集まっては相談をされたりしていましたね。そのころ教授会なんかでも大分議論がありまして、何しろあのころは何とか平穏におさめたいという一念だったですし、東大で加藤総長が運動場が何か広いところとかで何かやったというような話もあったので、こちらもやっぱりやらないうと、これはどうにもならないのかというのでね。だけど、評議会は何だかなかなかそこまでがむずかしい。岡田総長もどうもまだはつきりしないらしいし、これはいっぺん岡田総長のところへ行つて、ひとつ頑張つてやってみたらどうかと、進言した方がいいんじゃないかというような議論になってね、そのとき私は、もう評議員になつてたのかな。それで理学部長と、結局二、三人でね、岡田総長の池田のお宅まで行ったことがありますよ。

芝 それですか。昭和四十四年の一月に運動場で一度岡田総長を迎えて集会をやりましたね。

若槻 そうです。ところがそれも変なことになってしまいましたね。結局、岡田総長を守って自動車に乗せんらんことになって、一生懸

命人垣をつくった覚えがあります。それから昭和四十四年の五月頃でしたかね、中之島の講堂で民学同と団交をやられて岡田総長がダウンされたのは。この頃から総長代行が動き出してくるわけですよ。

梅溪 当時の瀧川春雄学生部長はもう始めから、ああいう理不尽なものには絶対出んと言ったんですね。まあ、それももっともなこと、何かそんな雰囲気がありましたね。

若槻 ええ、そうです。それにやっぱりね、ある程度はやるだけはやってみて、その上でまた考えよう、できるだけ宥和的にやってみようという、そういう気分でしたよ。

芝 理学部の教授会も一度、理学部の五階の大講義室へ先生方全員連れていかれて、いわゆる大衆団交というのが夜中まで続いたことがありましたね。

若槻 ありましたね。ひどいものでしたよ、あのときは。しかし、実際は連中が、やってくる少し前に情報が入ったんです。それでどこかへ逃げてやるうかと言う意見もあったのですが、「逃げたら、いつまでも逃げまわらないといかんから、もう逃げんで頑張ろう」と私が言うたんです。そしたら、みんな「そうだ、そうだ」言うてね。

芝 覚悟でおやりになってたんですね。

若槻 みんなも来るのを覚悟でおったんですよ。そしたらやってきて「大衆団交をやれ」と言うでしょう。それに「いやだ」と言った。

「これは、教授会だから出ていけ」と言った。そしたらね、向こうは何しろ四、五十人学生がみんなヘルメットをかぶって、棒を持つてるんですよ。そして教授一人を二人づつくらいで、両脇をこう持つてね、

引きずっていきよるんですよ。広田鋼蔵さんだったかな、こうやって寝てしまうんですよ。そしたら担がれていった(笑)。それでね、みんなそういうレジスタンスしながら上まで行ったんですよ。そして、皆を教壇に並べてね、「何か言え」と言うわけですよ。そのときは緒方惟一さんが部長の代理をしようとたんですよ。

芝 ああ、そうでしたか。村橋俊介先生はおられませんでしたね。

若槻 村橋先生はね、何かもう体の調子を崩しちゃったんですよ、やっぱりあんまりゴタゴタでね。で緒方さんはおったけど、緒方さんも黙っとるし、だんだん険悪になってきたから、私が立ってね、私五人委員会だから、まあ緒方さんの代わりしてやるうと思ってるね。何しろ大勢の教職員や学生がやってきてながめとるでしょう。みんなは一体何をしとるんだらうと思ってるからね。説明せないかんと思ってる、私が説明したんですよ。「いまわれわれは、こんな所で座ってるけど、これは座りたくて座ってんじゃないんだ。この連中がやってきて、教授会をやっているのを、二、三人づつでここまで引っ張り上げたんだ。こういう不法なことは本当に腹が立つんだ。これが現状だ。こんなんわしは相手にせん」と言うたんですよ。そしたらね、後ろで学生が手をたたいた。

芝 「そうだ、そうだ」と、言うのがいたんですよ。

若槻 そうしたらね、いきなり棒を持ったやつが行ってね、ボカーンと頭殴ってね、殴られた者は頭蓋骨折か何かになって伸びちゃったんですよ。それから、こりゃいかんということで、少し皆さんは手控えたんだけど、私はもう一番初めに言うたもんだから、向うがボカ

ンとしてしもうてね、だから私は殴られんで済んだけど。それから今度は緒方さんに、「何か言え」というたら、「おれも同じだ」と言うたんですよ。で、二、三人「右に同じ」と答えたら(笑)、そしたら怒りだしてね、それから今度、「言え、言え」というて、マイクを唇へたたきつけられて、だれか血出したね。杉本健三君かな。

芝 そうでしたかね。

若槻 それから、誰だったかね、落ちそうで落ちんような、何かフラフラ上手に言うと思ったね(笑)。

芝 それは池田重良さんでしょう。

若槻 だけど結局、あんまり相手にしないで、ただ何かしらしゃべってるという状況だった。

芝 内山龍雄さんはむしろ相手のやつをマイクをワーンとやって取って、自分でしゃべり出してね。マイクの取り合いになった。

若槻 全闘委の連中はね、要するに、いまの大学は悪いから、これを全部分解してしまうのが目的だと言うんですからね。もうこんなやつは相手にできんという腹が決まっちゃったようなもんですよ。皆さんも大体そうだったと思う。

梅溪 阪大の紛争としては、いま若槻先生からお話があったような状況から発展したんですが、学生の処分問題がきっかけでしたね。

熊谷 寮問題は少しフェイズが遅れていましたね。

若槻 処分問題ですよ。

山田 あの当時、東大から紛争が始まって、全国に拡がっていった。だからまあ、火種が何であつてもよかつたのでしょ。

若槻 そうですね。何でもよかったですよ。

山田 で、京大は寮が火種になったんだと思いますよ。阪大の場合、寮を火種にする必要はなかったわけですね。生協の問題の方で、処分問題が出てきて。寮にはいろいろ問題がありました。当時の紛争の主流にはなりませんでしたね。

熊谷 そのかわり、最後まで残りましたね。

芝 そういうことですね。

熊谷 若槻先生はいまのお話のように、紛争の一番最初のころから、絶頂の、最も激しいとき、さらに最後まで残った寮問題にいたるまで、常に大学の中枢部におられたわけですけど、いわゆる紛争のほかに、付随していろいろ問題がございましたね。初期のころは生協問題、それから大学改革論とか、いろんな問題があったわけですけど、先生は問題としてはやっぱり何が一番大きい問題だったという印象をお持ちですか。たとえば寮問題なんていうのは、一番大変な問題だったという印象をお持ちですか。

若槻 いやー、そんなんじゃないと思いますね。

熊谷 寮問題も一つの問題という程度で……。

若槻 寮問題は本当に大学の学生全部を動かすほどの力はないと思いますね。多数の学生がね、いろんなセクトに動かされるといような状態があったということが問題なんです。いまの処分問題なんか、処分されちゃってからも半年以上たってからの話ですよ。そんなものいままさら言うのは時効なんですよ、本当は。それをやっぱりあえて持つてくると、それがそれで火種になるんですからね。なるよう

な素地があったということが、本当は一番大きな問題だったと思いますね。

熊谷 寮固有の問題は紛争の直接のテーマとしては、どっちかという次元の低い問題なんですけれどね。しかし、寮というのが、ほかの大学の場合もそうでしたけども、そういう過激派学生の拠点になるわけですね。しかも、過激派学生だけの拠点というのなら、まだ扱方もあるんですけどもね、もう普通に入った、いわゆる正規寮生の生活の場でもあるんだから、扱いが非常にむずかしかったですね、最後まで。

若槻 そうですね。

芝 だから、紛争が終わって静まっていけばいくほど、それだけが浮き上がってきたわけですね。

若槻 ええ、ええ。

熊谷 結局、最後の拠点でしたからね。生活の拠点と学生運動の拠点としてね。

山田 私が学生部長の頃、つまり昭和四十五年頃はいましたが、紛争状態ではなかった。しかし、宮山寮の光熱費一律徴収や、途中入寮自由というような問題点があるあつたわけです。従来からの慣例というか、彼等の既得権を主張していたわけですね。

若槻 途中入寮の問題などいろいろあつたね。

山田 それはいろいろありましたが、昭和四十六年、四十七年ぐらゐから矛盾点がかつちり改めようとして、パーッと火がついたわけなんです。それから、釜洞醇太郎総長の終り頃にはかなり激しくなっ



たところをそのまま若槻先生が引き継がれた。ですから先生も大変だったわけですね。私らのように直接責任者でないものは、時々応援にゆくんですが、その頃の一般の先生方は「紛争も済んでおさまったのに、まだ何をガタガタやっとするんか」と、こう言うわけですね。生活委員の先生だけがしんどいわけです。

熊谷 だから、若槻先生のころなんかは、さっきの全国的な大学紛争のときとちょっと様子が違って、学内対策というのが非常にむずかしかったと思うんですね。いま山田先生のおっしゃったような雰囲気がありますね。ですから、私たちが生活委員の頃はね、元学生部長とか、旧生活委員などをして苦労された先生方に相談役をお願いしましたよ。顧問団みたいなものです。

若槻 顧問団がおったんですね。それでね、随分そういう方々のご意見は聞きました。それから、もう少し違った立場で考えられる人の意見も一遍聞いてみようというのでね、たとえば新しく本学へ来られたような先生に、一体客観的に見てどういふ感じがするだろうかというような話は聞いたことはあるけれども、これはまあ大体想像するよいうな答えしか、やっぱり返ってこないですね、もうこの辺で妥協は一切投げ捨ててやるしかしようがないと思いましたがね。しかし、その前に先生方によく知っておいてもらわないと、いわゆる紛争もすんで、平和ムードになっているというバックグラウンドがありましたからね。私はそのが一番気になってたんですよ。いくら理屈が通っていても、学内から突つかれたりしたら、どうしようもありませんからね。だから、総長名で学内向けに、しょっちゅう告示を出しました。これは筋の通

ったことをやってんだということを、半分はPRで、それから、後はいよいよ最後は法律的な手段に訴えたときの、やっぱりそれがどうでも要るといふようなこともありますね。それに学生が本当に前非を悔いてのってければそれに越したことはないというんで、そういうものばかり出してましたね(笑)。ある期間は。

山田 結局、長い時間をかけたということですね。

若槻 そうです。そうです。

梅溪 また、それが必要だったですね。

熊谷 時間をかけないとだめでしたね。

山田 結局、入寮募集停止に踏み切ったのが、あれ、いつだったですかね。

芝 それは昭和五十一年で、先生が総長のときでしたね。

山田 入寮募集停止に踏み切って、それをずっと続けてきたわけですね。

熊谷 最後までそれで頑張り通したのが、やっぱり大きな決め手ですね。

芝 それがなかったらできませんよ、途中入寮の問題もありましたからね。

熊谷 途中入寮は昔からフリーパスみたいな格好で入れてましたからね。訴訟でも、一番のウイークポイントはこの点だったんですよ。

若槻 それから、法学部の先生は、医者で言えば基礎だから、臨床の先生にも意見を聞かないかんと、法学部の出身で弁護士をやっている先生に相談にのってもらったりね、随分やったんですよ。

熊谷 本心に歴代のご苦労の蓄積が実っています。

芝 本心にそうだと思いますね。

熊谷 若槻先生が総長になられたころ、私は学生生活委員をしていましたが、まだ若気の至りというか、血気盛んといえますかね、先生に「総長、紛争とか、戦争をこわがっていたら、筋は通せませんからね、少々の紛争なんかぼくらが引受けますから、やっぱり筋を通していかんと、こちらも具合悪いですよ」と、申しあげたんですよ。したら先生が、「そら、そう言ってもらうのはありがたいけれど、大それた先生が、喧嘩や戦争をするのが本来の場所でもないからね。」と言われたのを覚えてるんですよ(笑)。総長ということにならると、やっぱり大変なんだなあということ、そのときに思ったんですよ。総長にあんなこと言ったの悪かったと思ってますよ(笑)。

若槻 それはタイミングということがあるんですがね。それで新稲寮はわりに留年する学生が少ないから正規寮生のいなくなる時期が早く来まして、だからこれをどうでもやらないかんといいのでね。山本明さんが学生部長でして、よくやってくれています、あのときは本当にフル回転したんですよ(笑)。

熊谷 あれで本心に成功のパターンが最初にできましたね。

芝 でも、若槻先生、あのときもいろいろ大変でしたね。

若槻 法律問題にも苦労しました。法務省に通ってもなかなかうまくいかないんですよ。

法律というのは、わりあい当り前のようなことでも、なかなか

「うん」と言ってくれない。

芝 やってしまおうと、後からは助けられるんですけども、やる前は助けられないもんだから(笑)。

若槻 それから斎藤寛治郎事務局長ね、あの人も事務的にはずいぶん世話になりました。それから、ワーキング・グループも大変苦労されましたな。

芝 そうですね。

熊谷 ワーキング・グループは釜洞総長のときにできたんですかね。

若槻 そうです。そうです。

山田 この名称は紛争のときにつけられたんですよ。工学部もとうとう昭和四十四年七月に原子力工学科の建物が封鎖されましたね。で、そのだいぶ前から吹田徳雄先生が、評議員だけやったら具合悪いというので、工学部にワーキング・グループというのをつくられたんですよ。八月になって釜洞先生が総長になられたとき、「ええ言葉があるな」ということでワーキング・グループをつくられました。当時はね、総長補佐とか、具体的な名前をつけますとね、その人たちの権限がどうのこうのとか、やっぱり角が立ったと思います。その点、英語で言うとね、分かったような分からんような、ごまかすのに都合がよい(笑)。

芝 しかし、もう定着してしまっただすね。

山田 定着したんです。このごろはもうワーキング・グループというのは軽いと言って、「総長補佐役」言うんでしょ。そうですね。

若槻 東大もそうでしたね。

熊谷 東大では、正式名称ですね、総長補佐というのは。

梅溪 しかし、吹田先生で、よう確認書書かあったでしょう。

山田 いや、一遍だけなんですよ。しかし、徹夜団交になりましたからね。一通だけではなかったかも知れませんが。

梅溪 学生と大衆団交して、確認書というのが、はやりましたでしょう。

若槻 ありましたね。

山田 吹田先生のおときは東野田でやったんですがね。はじめは、真面目に対応しなければいかなということ、予備折衝もやり、二時間の話し合いということで学部長、評議員、それから教室主任が参加、私も精密工学科の主任として参加しました。ところが、ヘルメット集団によって徹夜団交をやられたわけです。向こうもヘリクツを言うんですよ。予備折衝のときは工学部長だったが、今日は総長代行を相手だと。何かあの頃、集団で代行制になったんですね、総長は。

若槻 岡田先生がダウンされて、その後ですね、総長代行に山本巖さんがなられてからだったかね。それで、工学部は吹田さんが、中之島地区は伴忠康さんが、それから豊中地区は伊藤さんかな、伊藤順吉さんが総長の代わりをするんです。何かそういうふうになったことがありますね。

山田 とにかく、異常な雰囲気、真面目に話ができるような相手ではないですからね。頑張ってるのはばからしい。どうせ無効なんだから、確認書は。

熊谷 全部無効だから、何でも書いてしまえというね。

梅溪 そうだったんでしょうね。

山田 本当はわれわれ主任も書かされるとこだったんです。しかし、「学部長一人で十分、ほかは書くな、書くな。」と言うて頑張りました。そしたら連中にね、「そりゃな、お前みたいな雑魚は書かんでもええわ。」とやられました（笑）。ぼくからも書いとったら、吹田先生の風当たりがもうちょっと弱かったかもわからないのですが、「工学部の主任二十人そろって全部書きよった。」と（笑）。とにかく、吹田先生には悪いことをしたなと思っています。

芝 紛争を契機にして、われわれ教官の方も徐々に変わってきましたね。

若槻 はじめは真面目にやっていた。

芝 はじめは真面目にやって、だんだん要領よくなってきて、しかもいろんな各学部の考えもよくわかってきたし、はじめはバラバラという感じでしたものね。

熊谷 これを契機に、学部を超えての教官の一体感というようになったのができた、あれは副産物ですね。

芝 紛争のおかげかもしれん（笑）。本当にそうですね。

### 三 一貫教育、教養部問題

梅溪 つぎに大学改革、一貫教育について、先生にもいろいろご苦労願ったんですが、なかなかむつかしくて強力な改革はなかったんですが、そのときの問題点というか、それに対する先生のお考えなど拝聴できましたら、と思うんですけれども。

若槻 これはね、一貫教育という線はもう釜洞醇太郎総長のときに

扇谷尚さんなんかが中心になってまとめられましたね。それはまあ皆さん賛成をされたわけですが、それで専門科目を少し下におろすとかいうことはやられた。だけど何かまだ非常に不十分であるというところで、あと具体的にどういふうにやるのができるだろうかということで、学部長に集まっていたいて相談したと思うのです。私が少し考えましたのはね、カリキュラムの方はともかく、学生の指導の面で、教官一人当たりの学生数というのを、いろいろ表なんかをつくってみますとね、やっぱりなんといっても教養部が非常に手薄でした。だからちょっと学部からも応援してもらおうのがいんじゃないかというら、ことで、いろいろ議論したんですがね。そうすると結局どこで責任を持つかというようなことが問題でね。それから教養部の時期をもっと縮めたらいいんじゃないかというのを、大分ディスカッションをしてもらったんですがね。結局総論は賛成だけれども、各論は反対というのが多くてね。私はいつそ教養部を一年位にしてみましたらどうかという、少し極端な議論をしたんですがね。カリキュラムは別にしないで、そういうことを学部長にはいろいろお願いもしてみたことはありますけれども。

梅溪 そうですね、一年教養部案というのは、若槻先生の案ですね。若槻 だけど結局、それはいまのところ理学部で一年半というのが実行されただけです。

梅溪 工学部はもう前から、かなり古くから一年半ですね。

芝 先生のご在任のときに、ちょうど言語文化部がスタートいたしましたね。

若槻 言語文化部がスタートしたとき、私は言語文化部の充実のために、できるだけ努力するから、いままでの語学教育というか、とにかく実績を十分つくってもらいたいとお願いしました。

梅溪 なかなかいい建物ができましたね。

芝 場所もいいしね。日本全国で言語文化部というのは最初でございますね。

若槻 そうですね。後から真似するのでもできましたけどね。文部省も教養部の改革というのは、関心がありました。言文も、はじめは広島大学の方式というのと、それから学部に分属したらどうかという案があったんですが、私はあんまり賛成しなかったんですよ。とにかく言語文化部を充実するのと、それから体育関係をやって、それから大学院の担当の問題を解決したいと思っていました。そしたら兼任講座というのが東大で認められたというので、教養部長と相談して、その線ですめることになったんです。兼任講座ができるようになったのは、私が総長として最後の年の頃からですね。

芝 先生の時代からもうスタートしてたんですね。

若槻 そうですよ。

芝 もう一つ、若槻先生のとときにできたものとしては、国際交流会館がありますね。これも先生のとときでございましたね。

若槻 ええ。

芝 いまは本当に役に立っていますが、もう狭くなってしまいました。次はもうひとつ広いのが必要なんです。あれも大学から申請したわけですね。

若槻 ええ。それはそうですよ。

梅溪 神戸もちょっと関係あるんですね。

芝 そう、そう。神戸、京都の関係はどうだったんですか。阪大だけのものではないという……。

若槻 いや。阪大が初めに、留学生を泊めるところがないから何とかせいで言ったんです。それがちょうどタイミングがよくて、文部省の方も非常にそういう気分でした。事務次官の木田宏さんが非常に熱心に話に乗ってくれましたね。それで「案が小さいじゃないか、もっと大きくせえ」言うて、次官みずからね。それから「夫婦者も来るだろうから、子供の遊び場もつくってやれ」とかね、いろんなことを言ってくれたんですよ。それでこっちは大喜びでホイホイそれにのつたんですがね。それで実際につくる際には、国際電話の問題とか、食事の問題とか、いろいろ調査をしましたよ。

#### 四 共通一次入試スタート

梅溪 それから先生、例の大学入試センターにご関係になりましたね、国立大学協会（国大協）から。

若槻 ええ。

梅溪 私はごくしょっぱなに共通第一次学力試験（共通一次）をくりに行きましたがね。あれは文部省は非常に熱心だったんですが、いわゆる旧帝大でも非常に積極的だったんでしょかね。いまの問題は別として、滑り出しは。

若槻 いや、そんなに熱心ではないところが多かったですね。阪大

だってそんなに熱心だったわけじゃない。ただ、いまの入試はいろいろ批判されてますけどもね、共通一次前にはもっと非難されていました。つまり、難問、奇問が多くていかんというんですね。阪大はそうでもないのですが、教養部がない単科大学では問題を出せる先生があまりおらんわけですよ。それで、難問、奇問をどうしても出すと。それで実施までに七年かかったんですね。

入学試験のことは国大協の第二常置委員会の管轄なんです。私の前任の釜洞醇太郎総長が第二常置委員会だったので、私も第二常置委員会委員になって、それで一回か、二回会議やったぐらいで、前の委員長が定年でおやめになったので、私が委員長になった。入試の改善というのは、これはもう大問題だからというので、第二常置委員会だけではなしに、入試改善のための特別委員会をつくりましてね。それで副会長の京大の総長がその委員長になって、第二常置の委員長は副委員長になった。それで特別委員会の下に専門委員会がありました。しかし、私が総長になったときは、もうかなり大詰めのところに行っていたんですよ。東京工大か何かが最後まで言っていましたけれどもあえて反対しないというようなことを言ってね、それで結局、総会で決りました。それから今度は文部省で入試センターをつくらなきゃいかんというので、その折衝にも行きましたよ。センター長は加藤さんでした。入試センターもできて、もうこれで軌道に乗ったからというので、後は第二常置委員会に任せとるということになって、もとの委員会は解散したのです。それから国大協側は私が責任者になったんです。それで入試の時期を決めるとか、私立大学に入ってもらおうとか、



事務局長菅教授室での座談会風景

やっぱりいろいろ問題ありました。いまは私立大学は何かと喋って、私立大学にも交渉に行ったことあるんですよ。加藤さんと私ですね。早稲田の総長のところに話しに行ったけれども、全然もう話にならんかったです。

芝 いまでも第二常置委員会でディスカッションは続いているんですか、共通一次のことは。

若槻 ええ。だからいま、文部省からなんか科目減らせとかいうて、いろんなことを言ってるでしょう。減らしてね、それで、その科目ど

うでも自分の学部で要ると思ったら、二次試験でやればいいんですよ。ただ、高等学校の圧力があるんですよ、ものすごく。共通一次で落とされたら、その科目は高等学校で勉強せんというんですよ。

梅溪 ええ、しなくなりますね。

若槻 それでね、要するに難問、奇問を排する、それから共通的に一般科目はいい問題を使うということだけあれば、共通一次の問題だけ使って、それから二次試験も一緒に試験をするというのが一つの案ですね。もうコンピュータはどこにだってあるんだから、

センターで何もまとめてやらなくたっていいしね。

芝 事実上それに近づいてきているわけですね。

若槻 そう、そう。そうすれば試験の期日も遅らせられるんですよ。そのかわり、二度受けるチャンスをつくるためにそれこそ二次募集みたいなことをやるようにするとか、それから試験期日に少し自由度を与えるとかね、何かそんなことをするというようなことも一つのやりかたですわね。もう一遍昔に戻すようだけど、その方がいい学生が来るといって、府立大学なんかそうやってますよね。

芝 共通一次もこれで相当長い経験があったんだから、そのいいところだけ取って、悪いところを捨てるという改革ですね。

## 五 環境整備

梅溪 阪大も昭和五十六年に五十周年を迎え、創立五十周年記念事業募金も大体済んでいろいろ事業計画が考えられていますね。何かこういうものが阪大としていいんじゃないかというような、先生のお考えがありましたら最後にお話し願います。

若槻 そうですね、運動施設はもうかなり、吹田キャンパスを整備してできるわけですね。私はね、あんまりお金が要らん話だからね、木をいっぱい植えたらいと思うんだけど。だんだん大きくなりますからね。

山田 環境整備ですね。

若槻 小さい木でもね、木をもうちょっと植えないと。

梅溪 枯れる方も多くて、皆に努力していただいて、少しは植えて

いくようにしていますが、ほかの大学に比べれば、確かに少ないですね。

若槻 ええ、本当に。私は豊中キャンパスで経験があるんですけど、文部省から緑化のための予算というのを少しくれまして、それで何べんか木を植えたことあるんですがね、土が悪いんですよ。

芝 そうですよ、この辺はね。

若槻 ちょっと大きくならないし、それから枯れちゃう。

芝 吹田も豊中も両方とも粘土ですからね。

若槻 私は理学部のサイクロトロンの方にね、何べんも予算もらっては桜を植えたりしたんですが、みんな枯れちゃうんですね。それで、同じ予算なら少し木を減らして、その分よい土を入れたんですよ。それでクスノキだったけれども、それがよくついて、サイクロトロンの方、いまは大きくなってるのでしょ。あれね、ぼくの背ぐらのやつを植えたんですよ。それがある段階になると、急に、バートと大きくなりました。

芝 あの西側の松も、先生、こっちのバンデグラフのところですが。

若槻 あれは初めっからわりによくついていたんですね。

芝 よく大きくなってますね。

若槻 松は松くい虫にやられますからね、あんなもの植えたって、もう大きくなってからでもやられますからね。クスノキか何か小さい木でも……、あれはわりによく大きくなりますね。それで、ここ（吹田）と向こう（豊中）とずうっと大体土質が同じでしょう。

芝 そうです、そうです。

若槻 あんな木を少し植えたらいいと思うんだけど。

梅溪 吹田も豊中も大分ましになりましたけれど、工学部はまだ少ないですね。

山田 ええ、どんどん植えていってるんですけどね。その上、維持するための予算も必要ですね。やっぱり生き物ですからね、環境整備しようと思うと手入れがいるんですね。

若槻 それは人件費を払ってやるんじゃないかも、何かそういうことが好きな人を、部局ごとぐらいで責任者を決めるぐらいの意気込みがあれば、できるんじゃないですかね。

芝 いまは大高の森と浪高の庭で両方とも木が多いんですけども、桜などは徐々に植え足していかないとよくないと思います。

梅溪 若槻先生、本当に長いことお話しいただきましてありがとうございます。